

書評

ジュアノット・マルトゥレイ、マルティ・ジュアン・ダ・ガルバ『完訳ティラン・ロ・ブラン』、田澤耕訳、岩波書店、2007年、1023頁。

斎藤文子
東京大学

「徳高く勇敢な騎士は名誉と栄光に値し、その名声が時とともに忘れ去られるようなことがあってはならない」、騎士ティランの物語の序文で作者ジュアノット・マルトゥレイは高らかにうたっている。その1490年の出版から1世紀以上の時を経て、『ドン・キホーテ』のなかで「世界でもっとも優れた書物」と紹介され、『ティラン・ロ・ブラン』の評価はゆるぎないものになったにみえた。しかし作品はカタルーニャ語の盛衰と運命をともにせざるをえず、長いあいだ一部の研究者の間でのみ知られる奇書とされていた。40年ほど前、ペルーの小説家マリオ・バルガス＝リョサが絶賛し再評価が始まった。その成果の一つともいえるのが、2007年に田澤耕氏によって日本語に翻訳され、バルガス＝リョサが序文を寄せている本書である。ジュアノット・マルトゥレイの当初の意図を超え、ティラン・ロ・ブランの名声は忘れ去られるどころか、時とともに世界に広まっているのだ。

翻訳者田澤耕は、日本におけるカタルーニャの言語・文化研究の第一人者である。我が国で最初の本格的カタルーニャ語辞書である『カタルーニャ語辞典』（2002）、『日本語カタルーニャ語辞典』（2007）の編集、『カタルーニャ語文法入門』（1991）、『エクスプレス カタルーニャ語』（2001）などの文法入門書、『ガウディ建築入門』（1992）、『物語カタルーニャの歴史—知られざる地中海帝国の興亡』（2000）などのカタルーニャ文化や歴史を扱った著書を世に問い、またカタルーニャについての書物やカタルーニャ語で書かれた本の翻訳を数多く手がけている。日本におけるカタルーニャ語とその文化の普及をほとんど一人で背負っているといっても過言ではない。その田澤氏が、カタルーニャ文学の最大傑作といわれる『ティラン・ロ・ブラン』を訳出した。

この翻訳の重要性は文化普及という点にとどまらない。15世紀末から16世紀を通してヨーロッパ各地で読者を熱狂させた、イベリア半島生まれの騎士道物語の一冊が、本書によって初めて日本語で読めるようになった。騎士道物語のパロディとして書かれたセルバンテスの『ドン・キホーテ』は、1887年に初めてその一部が邦訳されて以来これまで数多くの翻訳が出版され、今現在本屋で手に入るものでさえ、異なる三種類が流通しているほどである。この状況に比べ、ドン・キホーテが、脳みそが干からびるまで愛読した騎士道物語は、前篇6章の蔵書検閲のエピソードで名前が上がったもののうち、『アマデイス・デ・ガウラ』を含め、一冊も翻訳されていなかった。ドン・キホーテの図書室で言及されなかった本を含めれば、イタリア語の韻文によって書かれたものではあるが、ルドヴィコ・アリオストによる『狂えるオルランド』が訳されているのみである（脇功訳、2001）。ヨーロッパ文学の源流ともいえる騎士道物語の傑作のひとつが、今回翻訳された意義は大きい。

訳文はたいへん読みやすい。戦さの場面、ストーリーの意外な展開、男女の心の機微、駆け引き、愛の場面など、この小説のワクワクする楽しさ、面白さを、わかりやすい日本語に移しかえている。また本の形態そのものが、セルバンテスが言う「楽しみの宝庫、気晴らしの鉱脈」を収めるにふさわしいものであることも強調しておきたい。銀の紙箱入り、革と布張りを模した表紙、金の箔押し of 背表紙、本文の紙は羊皮

紙を模したクリーム色で、各ページにイラストが入っているなど、きわめて丁寧に、贅沢に作られた本である。ずっしり重い宝石箱のようなこの本の値段が 16,800 円であることに、文句は言えないだろう。もっとも文庫化されれば、間違いなく多くの読者を獲得するはずだが。

バルガス＝リョサが寄せている序文（「ティラン・ロ・ブラン」-境界のない小説）は、2003 年に出たフランス語訳に付けられたものとほぼ同じ内容だが、最後の段落が日本人読者向けに書き換えられている。また巻末に 295 項目にわたる訳注と 22 頁の解説がつく。解説には、ティラン・ロ・ブランの旅程とアルムガバルスの転戦路を記した地図、作品・著者・時代背景の説明、作品のモデルのひとつと言われる『ラモン・ムンタネーの年代記』についてと、作品のオリジナリティーについての考察、カタルーニャ語とカタルーニャ文学の概説などが盛り込まれている。必要十分な解説である。ただそのなかで、『ティラン』の読者として女性が重要な役割を占めていたはずだが、女性の識字率は一般に低かったということを問題にしている箇所がある。最近の読書史研究によれば、この時代、文字が読める人だけではなく、読めない人も、耳で聞くことで読者となりえたことが明らかにされている。実際、目で読む読者よりも耳で聞く読者の方が数としては多かった。そのため、読者層を考える場合、必ずしも識字率を気にする必要はない、ということを指摘しておきたい。

読書家として目利きだったセルバンテスに「ともかくこれを家に持ちかえってお読みなさい」（『ドン・キホーテ』前篇 6 章）と言わしめた『ティラン・ロ・ブラン』が、日本語で読めるようになったことを心から喜びたい。